



【住 所】福岡県春日市須玖北4丁目5番地

【病院長】海江田 令次 先生

【病床数】600床

【スタッフ】医師8名(スタッフ3名、レジデント1名、非常勤4名)、看護師7名(うち内視鏡技師2名)、臨床工学技師1名

【内視鏡検査・治療総数】(平成20年度)上部消化管内視鏡検査 3,500件、下部消化管内視鏡検査 1,500件、ERCP 240件、内視鏡的止血術 400件、その他治療内視鏡250件(ESD 20件、胃瘻造設術 60件)

【内視鏡関連機器】内視鏡本体6台(内視鏡センター3台、健康管理センター1台、X線TV室1台、救命救急1台)、超音波内視鏡1台、上部用内視鏡8本、下部用内視鏡4本、側視鏡2本

## 地域の医療機関との連携と厚い信頼のもと 医療の原点である救急医療サービスの充実に尽力

### 年間約9,000台もの救急車が搬入する 全国屈指の救急病院

福岡県の中央部、春日市にある福岡徳洲会病院は、近隣の大野城市・太宰府市・筑紫野市を含む、人口約50万の医療圏をもつ急性期病院です。徳洲会医療グループでは救急医療を医療の原点としており、同院でも一次から三次までのあらゆる疾患や外傷の救急患者を365日24時間体制で全て受け入れています。北米型ERを早くから導入し、ERドクターによって診断と初期治療を行なって必要に応じて各専門科にコンサルトするというシステムを採用しています。地域の開業医や救急隊との連携も早くから進んでおり、現在では年間約9,000台の救急車が搬入する全国屈指の救急病院として、地域住民の健康と生命を守るために尽力しています。

### 診療科の枠を超えた密接なコミュニケーション により限られたスタッフで数多くの症例に対応

病院全体で救急医療に積極的に取り組んでいる中、内視鏡センターでも4人の医師が24時間オンコール体制で診療にあたっていますが、救急が多いため緊急内視鏡を行うことが多く、中でも吐血・下血に対する内視鏡止血術の件数は年間約400件を施行しています。脳血管障害の救急も積極的に受けて入れていることから、胃瘻造設術の件数も増加しており、多い年では年間100件の症例があります。同院では内視鏡センターの他にERや透視室にも内視鏡の機材を配置しており、適切な処置が迅速に行えることから地域の救急隊からも

厚い信頼を寄せられています。

内視鏡センターでは上部・下部を合わせて年間約5,000件の内視鏡検査を実施していますが、近年では外科を中心とした院内の他科からの紹介もあり、その件数は年々ますます増加傾向にあります。これは、病院全体で救急医療に取り組んでいるため日常的に各診療科間のコミュニケーションが緊密であり、スタッフ間の連携が良いことが起因しています。内視鏡検査は上部・下部ともに患者様が希望すればドルミカムを使ったセデーション下で行い、患者ケアに看護師を常時配置した上で安全に苦痛のない検査を実施しています。消化器内科部長の仲道孝次先生は、「当院は地域医療支援病院としての役割を担っていますので、患者様に内視鏡検査を受けたいと思っていただく動機付けを提供することも大切だと考えています。現在は性能上の観点から経鼻内視鏡の導入を見合わせていますが、2012年の新内視鏡センター開設の際にはスクリーニング検査用として導入したいと考えています」と、今後の内視鏡検査の方向性についてもお話をいただきました。

同院は2008年に病院機能評価Ver.5を取得しており、内視鏡の洗滌・消毒は消化器内視鏡学会の定めるガイドラインを遵守して実施しています。看護師が他科と業務を兼ねるなどスタッフの数が限られているので、安全性だけでなく業務効率も重視し、ディスプレイ化が可能な処置具については積極的にディスプレイ化を進めています。新内視鏡センターの開設に向け、今後は内視鏡の洗滌・消毒履歴や看護記録の管理を徹底し、さらにリスクマネジメントを強化すべく現在準備を進めています。

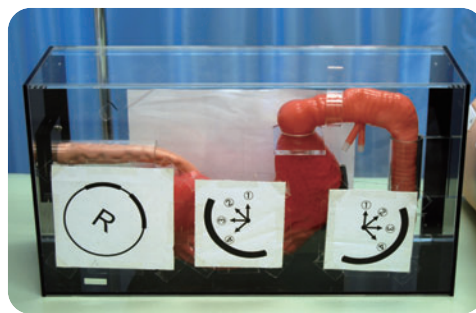
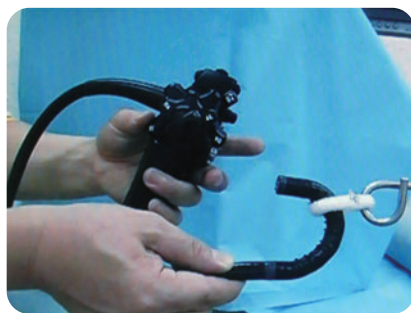
## ● 優れた消化器内科医を育成するため 手厚い研修体制で徹底したトレーニングを実施

内視鏡センターのもう一つの大きな特徴として、研修医の教育に注力していることが挙げられます。仲道先生は、「なるべく早く内視鏡の操作方法をマスターできるよう、当院で独自に作成したイラスト入りの教材ドリルを使用して学習してもらっています。まずはこのドリルで内視鏡のアングル操作やねじりの関係などの基本的なスコープコントロールを理解してもらい、次にヘアバンドを使ったドリルで内視鏡先端の動きについて学習します。内視鏡の操作は大腸内視鏡の挿入テクニックが基本となり、それをマスターすれば上部内視鏡やERCPIにも応用して早く技術を向上できると考えていますので、机上の学習の後にはコロンモデルを使ってトータルコロノスコーピー挿入術を訓練し、基本テクニックをしっかりと身につけてもらうようにしています」とお話になりました。同センターでは初期研修2年次から上部、下部の内視鏡検査とERCPIを同時にスタートさせていますが、

研修医が携わる全ての検査には必ず仲道先生自らが立合い、安全性を確保した上で研修医が安心して実際の症例を行えるような体制をとっているそうです。仲道先生は、「最近では消化器内科医の数が減少しつつありますので、研修医には早くから内視鏡診療へ興味を持ってもらい、一人でも多くの研修医に消化器内科医を志して欲しい」と、研修医の教育にかける熱い思いを語っていただきました。



消化器内科 部長  
仲道 孝次 先生



研修医のトレーニングに使用しているオリジナル教材



内視鏡センターのみなさん